朧たる影の中できいた。

八二、――この若者は、影の外へ出て、わたしへ近づき、そこの四角な光の中にゐるわたしの前へひれ伏し、さうしてそッとかう云つて、わたしを讃美した。

八三、――『わたくしはあなたが神様でゐらつしやらねばこそ、あなたを崇拜いたします。あなたがもし神様でゐらしつたら、さうして長らくの間お苦しみになつた揚句、みす〳〵死んでおゆきになる事が、あなたに何の値打がありませう？　若しあなたが神様でゐらしつたら、あなたの永遠とあなたの光りの中にある一切は、すべて大して値打がなくなるでせう。又誰が落ちついてあなたの犠牲を語り得るでせう？

八四、――若しあなたが神様でゐらしつたら、どこにあなたの寛仁大度があるでせう？そこにはただ神の遊戯だけしきやなくなつて了ふでせう。

八五、――かく偉大な、かく赤裸々な、さうして復活などはなさらないあなた様とは氣がつかず、往々にあなた様を神のやうに思ひ込んだわたくしをおゆるし下さいまし。』

八六、――マリヤ・マグダラもまたそこにゐた。夜の中に白く、又眞晝のやうに美しかつた。さうしてかの女の美には寶石の飾などはなかつた。

八七、――一大感激のうちに、かの女は爪立して立つてゐた。爾來人々は、かの女が、又昔のやうに七つの惡魔に捉はれてゐると噂しあつてゐた。

八八、――かの女は、わたしが果して何者であつたか、それをわたしに語つた。

八九、――かの女がわたしに云つた。『人間の苦悶と悲慘と偉大とを示すために、その手に高くそれ等をさしあげたお方が一人お見えになつたのです。

九〇、――あなたはこの世のはじめからかくれてゐたいろんな事を告知らして下さいました。

九一、――「徹底的に汝等自身を信ぜよ。汝等の姿に則つて人生をつくりなほせ。汝等は救はるゝならん。

九二、――各自はその神を制御せよ。一切人間はその王を制御せよ。」と、かうした種子をあなたはまいて下さいました。

九三、――さうしてあなたは神性にして下さいました。

九四、――さうしてわたくしのからだ、即ちわたくしの外側ばかりでなく、徹頭徹尾のわたくしといふものによつて、あなたは禮讃されることになりました。

九五、――わたくしの心臓がわたくしの中にかくれてをりますやうに、わたくしはあなたのところにかくれてをります。あなたは何にも仰つしやらずに、わたくしに苦しめと仰つしやつて下さいました。

九六、――わたくしと申すものこそ、わたくしに物を仰つしやつて下さつたお方の紀念碑でムいます。

九七、――あなたのお光りは永遠に！』

九八、――この女がたまつた時、さうしてその聲がもはやわたしにきこえずなつた時、わたしはたゞこのたつた一人の弟子を持つたゝめにこの世の中へ來たものだつたといふ事を知つた。

九九、――さうしてたゞかの女の心の神變不可思議によつて、わたしはこの弟子をもつたわけだ。

一〇〇、――又もう一人の方の、かの慚愧の美を傷づけまいとしてゐた弟子も、恐らく同じわけだつたらう。と、かれはわたしに近よつて、月光のやうに蒼い又青白いその腕をわたしの方へさしのべつゝ云つた。

一〇一、――『この人です。』

第三十三章

一、――預言者ではないけれど、

二、――わたしの豫想してゐたとほり、兵士どもがわたしをつかまへに來た。

三、――ところが、この憐むべき兵士等の、いつもその手を下してゐたのは、自分達自分の上なのだ。

四、――弟子達は解散して了つた。

五、――教會の中樞、新世界の源泉は散失せて了ふであらう。

六、――わたしはかれ等の一人が云つてるのをきいた。『わたしはこの人を知りません。この人が何者だつたものか、わたしは顧向いても見ませんでした。』

七、――わたしは司祭や有力者達と共に四壁のうちへ閉ぢ込められた。

八、――さうして、この法廷は卽ち、金色燦爛たる大司祭、王侯の如き富者、名聲赫々たる軍人、野獸の如き虛言者、及び巧言令色の詭辯家から成立つてゐた。――で、かれ等はみんな腕輪をはめてゐた。又耳には耳輪をブラさげてゐた。ひツくるめて、唯一の或根性と、唯一の或力を代表してゐた。

九、――かれ等はわたしに質問するやうなふりをしてゐた。で、わたしの言葉に對しては、わたしのいふ意味などは眼中になく、かれ等の都合がいゝやうに應答してゐた。

一〇、――さうしてかれ等はわたしが國家に對して陰謀をたくらんだ事にして置きたかつたのだ。

一一、――わたしは默つて了つた。わたしは裁く者どもを裁くのはやめにした。

一二、――そこで一同はわたしを外へ押し出した。羅馬の役人の前へ。

一三、――逾越節の用意してた時なので、群集は法廷へは這入つて來なかつた。開かれた戸口で、

亂暴につきとばされたわたしは、折から廣場へとりひろげられた、そのガヤ〳〵と騒々しいお祭の仕事場を見た。

一四、――役人は役人として責任だけ考へてゐたのだ。さうして『ほう、この男は何か惡い事をしたのか？』などゝ云つてゐた。

一五、――一同は答へた。『こいつは人民を煽動しました。のみならず、カイザルがお出でゞあるにも拘らず、こいつは自分が王だなどゝぬかしました。』

一六、――役人は不親切な顏つきでわたしに云つた。『氣の毒な預言者さん、みんながかうしてカイザルの事をいふのに、若しお前さんを罰しないと、わたしが困るよ。』

一七、――この大官がわたしに姿をかくしてもらひたかつたのは、わたしにはよく分つてゐた。が、かれはすべての有力者同樣に、僞善者でもあり卑怯者でもあつた。

一八、――民衆はこの日罪人を一人赦すことができたわけだが、司祭等の鼓吹によつて叫んだ民衆は、わたしよりは（その時牢獄につながれてゐた）ユダ・バラバをゆるす事にした。

一九、――さて、わたしに死刑の宣告を下して、それがいよ〳〵きまつた時、役人はその冷やゝかな眼で、ジロ〳〵わたしを見ながら、一隅でそツとわたしに云つた。『ユダヤ王なンぞわたしの眼中にはない。だが、ユダヤ主が恐いより、わたしにやお前さんの絶望的な影響の方がズツと恐いよ。』

二〇、――みんなの見る前で、かれ等はわたしに荊の冠をかぶせ、紫の衣を着せ、それから蘆の笏をもたした。口々にかれ等が云つた。『オヽ、オヽ、これこそユダヤの王樣だ。』さうしてわたしの前へ平伏しながら、笑ひ興じつゝ、わたしをビシヤリと打つた。

二一、――わたしはダマスコ道の男の事を考へた。いよ〳〵わたしの榮光がはじまつたわけだ。

二二、――わたしは考へた。『上層の人達はわたしの姿や、わたしの名前が、かれ等の間に復活する日が來ると、わたしを自分達のやうにこしらへあげるだらう。

二三、――かれ等はわたしに王の着物をきせるだらう。笏をもたせるだらう。

二四、――かれ等はわたしを痛くする冠をわたしにかぶせるだらう。

二五、――かれ等はわたしの前にひれ伏すだらう。

二六、――さうしてわたしか打つだらう。』

第三十四章

一、――十字架にかゝる。

二、――さつきは實に恐かつた！

三、――痛くて、身の毛のよだつほど引ツ張りつけられた。

四、——血が流れた。わたしは自分の血に喘いだ。
五、——だが、わたしはまだわたしの前を見る事ができた。
六、——で、そこには大して人のゐない事がわかつた。
七、——が、ゐるものはみんなわたしに背いてゐた。
八、——そこに友達がゐたにしても、かれ等は友達と名のる勇氣はなかつた。
九、——みんな昔わたしと一緒にゐたものだが、それはわたしがかれ等を支配してゐたからだ。
一〇、——が、その群集は風のまにまに四散して了つた。
一一、——かれ等はみんなたゞ自分達を支配する者ばかり崇拜するからだ。權勢の赴くところへ信仰も赴く。
一二、——が、十字架のかたちに引きのばされた人間であるわたしは、依然としてかれ等に信を置く。今日かれ等は自分達のしてゐることがわからないのだ。
一三、——さうしてむざ〳〵と自己を忘却してゐる。
一四、——正を行ふこと。不正をこはすこと。
一五、——わたしがその魂をまつすぐにしたユダヤ民族は今後わたしを助けて、この麹酵を宇宙間へふりまいてくれるだらう。その時には、天下に一つしきやなくなつてゐる民衆のたゞ中で、身をもつてバラ〳〵と蒔かれてゐるにちがひない。
一六、——依然としてそれが民衆の唯一の大牧者たる不幸そのものから、四散して了つた弟子達。
一七、——わたしは十字架にかゝつてゐる。十字架の上でわたしは今死ぬところだ。
一八、——わたしの思想も同樣に十字架にかゝるだらう。
一九、——が、その思想は十字架の上では死なゝいであらう。
二〇、——天使のやうに朗らかな、又惡魔のやうに反抗的な人類の靈よ！
二一、——わたしはお前が好きだ。かれ等が好きだ。
二二、——一切の人間であり、又まつたく何物でもない貧民どもが好きだ。
二三、——あゝ、風力の如く行衞もしれぬ
二四、——自然の一勢力よ！
二三、——血ぞめの誓紙として、
二六、——わたしはかれ等の心臟の上へ、わたしの言葉をかきつけて置かう。
二七、——この十字架にかゝつたわたしこそ、
二八、——十字架像の基督には反對するわたしなのだ。
二九、——その肉體が赤旗であるところの、神聖な犧牲の動物たるわたしこそ、今や人類の肉團と、

二三大共犯者等との間に開始されたこの戰爭をば終極まで見るわたしなのだ。
三〇、——わたしを爰へ釘づけにしたのはその同じ共犯者等だ。
三一、——それはわたしが民衆の救世主であり、又人間達の言葉だつたからだ。
三二、——世間が世間であつて以來、かれ等は地上で一大革命彈壓を行つて來たものだ。
三三、——が、屈從の罪のために最後へとりのこされたもの共は、たえきれぬ悲慘の極、先頭へ立つやうになるであらう。
三四、——さうしてかれ等は堂々たるものとなるであらう。
三五、——絶え入る前に、
三六、——目をつぶりながら、
三七、——わたしにはまだそれがわかる。
三八、——わたしの内面で、裂けちぎれたわたしの口で、わたしはまだかう叫ぶ。
三九、——『おゝ、民衆よ。わたしはお前の最後の審判を信ずる。
四〇、——その時お前は赤裸々の福音が握れるだらう。
四一、——おゝ、民衆よ。その時お前は民衆になれるだらう。』
四二、——わたしは生きてゐる限り諸君にかう云ひつゞけた。『わたしは諸君に平和はもたらさぬ。戰爭をもたらしてゐる。』眞の平和は戰爭の彼岸にあるからだ。大洪水の彼岸にあるからだ。
四三、——わたしが生命に卽してゐたればこそ、わたしは劍をもつて來たのだ。又父子の間に、兄弟の間に、主從の間に、不和をかもしに來たのだ。新同盟を締結するために。
四四、——地の一切の王侯にそむいて、
四五、——立て、地の呪はれたる者どもよ。
四六、——これこそ自己以上の苦しみだ。これこそ自己沒却の新同盟の血だ。わたしの五臟六腑から出るこの血の上で、わたしは口を開いた。さうしてかれ等はわたしの血にぬれた叫び聲をきいた。
四七、——『わたしは世の中に勝つた！』
四八、——さうしてわたしの頭がグタリとなつたのはその瞬間だ。わたしの叫び聲に天が裂けたのはこの瞬間だ。
四九、——マリヤの子イエスの福音のをはり。
五〇、——イエスが諸君を救ひに來てほしい。苦しめられてゐる諸君をば。道德律と確實とに一個の力を求めながら、人間の全能にあまりに絶望して、盲滅法今更雲中の神々へ手をさしのべたり、風の如くに過ぎ去る言葉に聽耳を立てたり、又光明のしがらみや靑天井と鉢合しつゝある諸君をば。同樣に、ほとんど世界の全國民が僞善者どもの手中にある今日、秩序正しく整列して、純粹な、聰明な、

又正當な革命の思想をば、人類の偉大なる宗教魂の中へ据ゑつけつゝある諸君をば。さうあつてほしい。

註

他の一切の人より以上に、人間を理解し、人間を位置づけ、さうして人間に方針を與へた、完全なる人間らしい人間、耶蘇その人に見參すべく、眞の過去まで遡らうとしたわたしの企てに對して、わたしの目を開いてくれた考證、指針、及び理趣等に關しては、わたしは――『義人耶蘇に追隨して』――といふ一書のうちで、それを披露するであらう。

われ〳〵は、獨立批評が實證的客觀的方法で基督教の根源を探究し、さうしてそれによつて光明を齎すべき權利を獲得した時代へ這入つたばかりである。だから、本當に基督解釋の生まれたのはほんのきのふの事だ。で、その解釋はこの大問題の廢墟とも稱すべきものを一掃して、既に幾多の誤謬、幾多の打算、幾多の揑造をば、忌憚なく暴露した。さうして經典的聖書と、及び正統說のみならず、かの官立教育によつて適用された基督教的諸傳統とは、歷史的にはほとんど信頼の置けないものである事が確定された。これは恐らく、人類がその編年史を編纂する氣になつて以來、『成立秩序』の、お定まりの拘束的手續によつて支持された迷信が、この點に關して、長い間、歷史に抵抗して來た場合を指してゐるのぢやない。

わたしは、文士といふものは、かうした主題を自分の思ひつきや自分の趣味で取扱ふ權利のないものだ、と考へてゐる一人だ。公人たる文士は自ら欺く權利はない。何となれば自ら欺く事は欺く事だからだ。文士は自己の頭を通過するほどのものをば、それを表現するに先だつて、細心に檢定する義務がある。又過去の一人物を描寫すべく沒頭する時、そのモデルに從ふ義務がある。

併しながら、このガリラヤに去來した、憐むべき、深刻な預言者、人がかれをどんな風に取扱ふやうになつたか、又いかなる荒唐無稽の榮光をば時代と共にかれにおツかぶせて了ふやうになつたか、さうしてかれの歸結とは全く異つた目的の下に――身も魂も――利用されて了つたか、全く知らなかつたこの預言者を取扱ふに方つて、わたしはプラトンの對話篇が、その幻術的展開のうちに、ソクラテスの風貌を髣髴せしめてゐると、同じ種類の歸納法によつて、科學批評が福音書からかれの風貌を救脫してゐる事實を採用する。

若しわたしが認定の傳統を自分勝手に取扱つたところがあつたとしたら、それはわたしの假定が、いつも、より以上に本當らしい輪廓をつくつてゐるやうに、又よりよく眞理に近づいてゐるやうに、わたしには思はれたからだ。併し、その實在性がかのスコラ哲學や教理書によつて立證されてゐるのではなくて、『羅馬の第八世紀に、人間の悲慘と苦悶と偉大とを手にして、それを人に示すべく、さしあげて見せた人間が一人現れた。』といふ、唯一の精神的寶物の裝飾によつて立證されてゐるところの、さうした姿をわたしは決して見失はなかつたと信ずる。

わたしは尙かういふ事を附加へたいと思ふ。『これ等の事は過去のものぢやない。いつでもある。今日もある。』と。

若しわたしが日夜反覆して聖書を讀み、又ドグマにもどつて書かれたる澤山の著書を研究したとすれば、それは或再興を實現しようとするところの、又一古典學者の如く、撞着なく汚點なき一福音書――卽ち復舊福音書を發見せんと試みるところの、その藝術的喜びのためではない。

それは現代の不安者、苦悶者に、わたしが話しかけ得るためである。――たゞ一瞥の外には、決して人に許されなかつたところの、この神聖なる實例に從つて、經濟的、社會的、政治的、智能的、又道德的宿命が、人をして偶像の破壞者たるべく慫慂しつゝある今日。

それは一切の待ちのぞむ人々へ、（物質進化の頂上にある）現代の頽廢と古代のそれとの間に、又誕生期の基督敎と、宇宙をこじあげはじめてゐる、新しい桿杆との間に、カツキリと浮き出してゐる、すばらしい類似點を示さんがためである。

*

この書の各ページを煩はしくしないために、本文中に充滿する引用句の原文參照をば、符號づけにして指示する事はやめました。それ等の引句は、舊新約全書中から汲んで來たもの以外に、第二經典

とか、或僞作追加の諸經典、即ち、—— Evangile de Pierre, Protévangile de Jacques, Evangile de l'Enfance, Papyrus d'Oxyrhynchos, Doctrine d'Addaï, Actes de Thomas, Lectionnaire-syriaque-palestinien, variantes manuscrites extra-canoniques (notamment celle du Codex Cantobrigiensis), paroles non canoniques de Jésus rapportées par Clément d'Alexandrie, Origène, Saint-Augustin, le Pseudo Cyrien, le Pseudo Clément Romain, traditions musulmanes éparses (Ephrem Lyrus, etc……) et koran ; enfin litterature juive préchrétienne ; L'Ascencion d'Joaïe, le liare d'Hénoch, les Oracles Sibyllius, etc…… から拜借した。

*

人はこの書の中に、近代的現代的製造にかゝる言句を發見した。願くはこれ等口頭の時代錯誤をば、作者の無識に歸せさらん事を。又地方色を失へる稱呼の下に、思想事物を示したのは、要するに御用聖書飜譯者の傳統に從つたにすぎない。新汚點をなすところのこれ等の文句は、明らかに當時問題であつた事物思想に相當してゐたものを示してゐる。——かの章句を小面倒なる陳腐な術語的名稱や形容澤山の成語にまさる事萬々だ。

アンリ・バルビュス。
一千九百二十六年九月。

昭和五年七月十五日印刷
昭和五年七月二十五日發行

版權所有

耶蘇定價金壹圓

譯者　武林無想庵
發行者　山本三生　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
印刷者　椎名昇　東京市芝區田村町八十一番地

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地　改造社　替口座東京八四〇二番　電話(43)一一二一番・二一二三番・二一二四番

（長谷部製本）

二葉印刷合資會社印

新鋭文學叢書

書名	著者	内容	刊行
放浪時代	龍膽寺雄著	創作 放浪時代 柴の夫人 コサビネ館の抜錨 評論 ナンセンス文學論 藝術に於けるレアリティ 腐屋 關車に巣喰ふ	新四六判 二四六頁 定價三十錢 送料六錢
ボール紙の皇帝萬歲	久野豐彦著	ブロッケン山の妖魔。野球時計が空つぽになつた寺廻。寫話。機關ダンサアの手記。ソヴエッロシアの老政治家。村の驛。動詩。評判の巡い春。皇帝萬歲。カピタリスト。家。スポルテ。ボール紙の裏と裸女。月にでも乘つてみたい。	新四六判 二五四頁 定價三十錢 送料六錢
隕石の寢床	中村正常著	マカロニ。アリストテレスの後裔。女學生氣質。二組の登場人物。隕石の寢床。厭世哲學。京鹿夜話。書伯。鄙章。時計の下の求愛。一家。日曜日の手紙。	新四六判 二六八頁 定價三十錢 送料六錢
なつかしき現實	井伏鱒二著	答問・挿話・小品。朝の散歩と平野屋。村上オハツ。うぐひす。先輩。訪問記。初秋。一挿話。私の保證人。初戀。場面の效果。細部。カナリヤ。たま蟲を見る。或講判。かゝる戀愛。逝けて行く記。十二年間。	新四六判 二三六頁 定價三十錢 送料六錢
傷だらけの歌	藤澤桓夫著	ローザになれなかつた女。大學生Nの慶言。琉球の武器。死者。幾度をする話。墓地で傳操をする男。生活の旗。骨相學。孤と。幾蔦原。渡り鳥。第三の涙。車掌はどんな風に流れ。たか。鬼蔦。農村では。赤ん坊の話。失業者の習。傷だらけの歌。	新四六判 二四八頁 定價三十錢 送料六錢
反逆の呂律	武田麟太郎著	W町の貞操。出兒場風景。止。兒。第一章。政戰主義。人の別れ。反逆。呂律。變。化した。船。人。末。高梁。の下。女。ある。生。夜。太。の最初の日。海濱。料理人。蜜草。人間。の歌。五月	新四六判 二五二頁 定價三十錢 送料六錢
情報	立野信之著	傳染病。情報。隨落。こんな遊戯。流れ者。水兵服の少女。抗議。花嫁。混亂。海軍。濱番人。	新四六判 二三八頁 定價三十錢 送料六錢
浮動する地價	黑島傳治著	浮動する地價。黑奴の五郎右衛門。阿の伊。幼時。栗本の負傷。土鼠と落盤。本をたづねて。若い妻。穴。リヤーリヤとマルーシヤ。	新四六判 二二二頁 定價三十錢 送料六錢

新鋭文學叢書

書名	著者	内容	刊行
耕地	平林たい子著	活花と鼠。蚤の中。醬油工場。サイレン。經新聞。銭價補償法と娼女たち。軟設列車。勞働者の妻。耕地。足音	新四六判 二三六頁 定價三十錢 送料六錢
屍の海	岩藤雪夫著	屍の海 赤い灯	新四六判 二四〇頁 定價三十錢 送料六錢
闘ひ	中本たか子著	闘ひ。鎖。圖境。半植民地の紳士諸君。便衣隊創設。第四の壁。臨時休業。	新四六判 二七〇頁 定價三十錢 送料六錢
放浪記	林芙美子著	放浪記以前。飯屋と淫賣婦。裡にたつて。目標を失す。百面相。赤いスリツパ。粗忽者の涙。雷雨。秋が來たんだ。濁り酒。一人旅。古劇。女の吸殼。秋の唇。下谷の家	新四六判 二六〇頁 定價三十錢 送料六錢
正子とその職業	岡田禎子著	愛撫 春は還る 出世作兵衛 正子とその職業 夢魔	新四六判 二六〇頁 定價三十錢 送料六錢
研究會挿話	窪川いね子著	勞働者の家。レストラン。洛陽。怒り。小説三つ。街頭の一歩。我がはしがき。勤人。研究會挿話。	新四六判 二三〇頁 定價三十錢 送料六錢
ブルジョア	芹澤光治良著	小説 ブルジョア 結核患者(一名或るコンポジション)「忍耐の人々」施療サナの人々。絶食同盟を續つて。示威運動。雪解 戯曲 出發(一幕二場) 家(三幕)	新四六判 約二五〇頁 定價三十錢 送料六錢
不器用な天使	堀辰雄著	I ルウベンスの臨畫 不器用な天使 水族館 獄 ジゴンと僕 死の素描 風景畫 音樂のたかで II ヘリオトロープ 眠り はがき ファンタスチック コント 土曜日 天使達が 墜は 崩 III アムステルダムの水兵。ヒルデスハイムの面影。 眠つてゐる男	新四六判 約二五〇頁 定價三十錢 送料六錢

改造文庫

菊池寛著

第一一五篇 短篇小説篇（現代物1）	身投げ救助隊、ゼラール中尉、勲章を貰ふ話、盗人を飼ふ、青木の出京、我鬼、晩年、たつあな姫、ある抗議書、まどつく先生、覺醒者、死者を嗤ふ、大島のできる話、若彩焦判長、無名作家の日記、敵の罪式、父の横恋、友と友との間、菊氏の華々しい初期の作品を收む。	四九四頁 定價五十錢 送料十錢	
第一一六篇 短篇小説篇（現代物2）	顔面の死去、駒貞事、出世、神の如く弱し、死床の願ひ、盗者被盗者、儲ましき配偶、從妹、幽吉の誘惑、妻の非難、島原心中、濡行兒、將棋の師、天の配劑、ある青年、肉罠、待達、鬼、自讃、戀愛詐欺、歓待、敵愾、鬼附の印、小説「灰色の鑑」、M侯爵と寫眞師、説教、マスク、妻の非難、R等。	四一二頁 定價四十錢 送料八錢	
第一一七篇 短篇小説篇（時代物）	ある敵打の話、三浦右衛門の最後、恩を返す話、史直卿行狀記、恩讐の殺方に、藤十郎の戀、ある戀の話、鼠樂、笑ひ、名君、義民其兵衛、形、闘學事始、入れ札、亂世、仇討三題、頭巾作り上人俊寛、船醫の立場、侍唐母子、遊女の天國、石本檢校、羽衣、仇討中世譚、返り討、他數篇。	四九二頁 定價五十錢 送料十錢	
第一一八篇 短篇小説集	江戸つ子、道を訊く女、廻廊の弟子、病人と雛廚者、貧みをした者、義勇、寫眞、おせつかい、齒痛、姉の覺書、中傷者、僞軍國美談、父母妻子、惡因緣、成日來た人達、盗み、ある記錄、撥苦笑、不孝、覺兒不死、安樂將子、蟹フライ、敗北、盛岡にて、母子、の發生、妻の感傷。	三七四頁 定價四十錢 送料八錢	
第一一九篇 戯曲篇（現代物）	父歸る、順番、地獄のドン・ファン、姉、愚徒の子、屋上の狂人、海の勇者、ある兄弟、時と戀愛、兄の場合、震災餘譚、夫婦、濃泉湯小景、盆栽、ドラマチックスケッチ、蘭學制説、貞操、時の氏神、戀愛病患者、妻、原敬、他數篇を收む。	四八八頁 定價五十錢 送料十錢	
第一二〇篇 戯曲篇（時代物）	奇蹟、敵討以上、藤十郎の戀、夢の屋根、時勢は移る、岩見重太郎、玄宗の心持、裂姿の良人、歌舞伎若衆、小野小町、義民其兵衛、眞似、浦の苦屋、丸橋忠彌、石龍山、亡兆、入れ札、遇村田之助、仇討出世譚、秀吉と清正等、侍氏が時代物一粒選の名篇揃ひ。	四六八頁 定價五十錢 送料十錢	
第一二一篇 眞珠夫人	政治家の父の犠牲となり、戀人に背いて價値者莊田に嫁いだ瑠璃子は、妖艶比ひなき美貌と才智の持主であつた。が、彼女の振舞は蜘蛛の如く、彼女に吸引されて集ひ來る多く の青年の純眞を引裂いてしまふ。遂に彼女怨恨と復讐の刃に倒れた。併しそこには此男二人女一人、勝つ者敗る、者、母となるまで、良人の罪、子故の力、戰ふ母、靜子の家出の手紙、愛すればこそ、斯くて悪愛は空しく、最初にして最後の擁手が交される―氏が雜誌に寄き初めた最初の通俗小説で「婦女界」をもて今日の盛況あらしめた一素因を爲したとさへ稱さる名篇である。	三六〇頁 定價四十錢 送料八錢	
第一二二篇 慈悲心鳥	曳賊一宿の三助たる職造と、帝都に榮華を誇る百萬長者の令嬢美津子が、一瞬間の温泉宿に於ける奇遇に端を發し、運命は綯る小車の如く錯綜し、驚絶し、激突し炎華と燃ゆ。貞操ある血涙あり、灼熱凡てを焼き盡して已まざる意氣地、階級闘爭！。氏が奔放不屈なる正義觀の社會的大裁現である。	三九〇頁 定價四十錢 送料八錢	
第一二四篇 火華	前大臣令嬢、女給、新藝の藝者、未亡人、美男の法學士、作者は全知全能の神の如く、それ〳〵の人間の運命を左右した！、宮田と村川との爭闘から偶然が生んだ宮田の死、即ち實く侯爵子の死そして第一の接吻から第二の接吻を受けるまで、これは小説ではなく事實ではなかつたらうか？	二九四頁 定價三十錢 送料六錢	
第一三〇篇 第二の接吻			

藏本

387
264

終